國學院大學学術情報リポジトリ

# 文字が示す音の読み方指導の実践



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-06<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 長田, 恵理, 赤井, 晴子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00001384 |

# 文字が示す音の読み方指導の実践

長田　恵理　　赤井　晴子

**【要旨】**

本研究は，小学校外国語活動において，文字が示す音を知り，そのルールに合う単語の読み方・書き方の指導をした事例における児童と指導者の意識を調査したものである。

６年児童に対し，シンセティック・フォニックスの手法を用いて，2017年５月から毎回15分を使って，文字が示す音の読み方指導を行い，児童の「文字の音を学ぶこと」に対する意識を4件法と自由記述で調査した。また，指導者には児童の様子や指導法に対する意識について質問紙調査と補足的に口頭での聞き取りを行った。さらに，この児童たちが中学１年の６月に，５つの３文字語の書き取り課題を課し，学習内容の保持について調査した。

アンケート調査に対する児童の回答は肯定的な意見が多く，さらに文字の音を学ぶことに対する意欲と役立ち感を感じていることが分かった。担任もおおむねフォニックス指導に対して肯定的な態度を示したほか，指導に関わる教員それぞれの特徴を活かした指導が行われ，ティームティーチングがうまく機能している様子がうかがわれた。中学１年の書き取り調査では単語によって正答率にばらつきがみられたものの，６年次に学習した「文字が示す音の読み方」について有用感を持っている生徒が多かった。

**【キーワード】**

小学校外国語教育　文字指導　音読み　ティームティーチング　フォニックス

## １．はじめに

2017年３月に『小学校学習指導要領』の改訂が告示され，この新しい学習指導要領の完全実施となる2020年より，これまでの「外国語活動」が小学校３，４年生の必修となり，５，６年生では新たに外国語が必修となることが決定した。教科としての「外国語」は，これまで音声中心で「聞く」「話す」が主であった外国語活動から，「読む」「書く」の２技能[1)]も指導内容に含まれるようになったことが大きな変化の一つであるが，「読む」ことについて，『小学校学習指導要領解説外国語編』（文部科学省，2017）では「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようになる」ために「語の中で用いられる場合の文字が示す音の読み方を指導すること」と書かれている。これを具現化するように，2018～19年の移行期用教材として各校に配布されている『We can!１』『We can!２』の冊子および補助教材のワークシートには初頭音に気付かせるような活動が含まれ，電子教材にはジングルと呼ばれる，アルファベット26文字の名前読み（aを[ei]と読む）と音読み（aの基本の音は/æ/）にこの文字から始まる単語を組み合わせた

音声教材もある。

新しい学習指導要領で示される文字指導は初頭音への気づきであり，その知識を用いて単語を書くことまでは求められていない。実際，『小学校学習指導要領解説　外国語編』では「中学校で発音と綴りとを関連付けて指導することに留意し，小学校では音声と文字とを関連付ける指導に留め」る（文部科学省, 2017）と書かれている。一方で，一部の小学校ではすでに綴りにつながるような文字指導を行っているようである。そこで本研究では，文字指導を熟知している中学校教員が中心となり，担任やALTを巻き込んだティームティーチングの形で，先行的に児童に音の読み方の指導をし，簡単な単語の綴りまでワークシートに書く活動を取り入れているある小学校の授業の内容を調査するとともに，児童・教員の意識，この授業を受けた児童が中学１年生になった時の意識を探ることで，今後の文字指導のありかたへのヒントを得たいと考えた。

## ２．先行研究

### ２．１　文字指導

研究開発学校などで研究のために行われていた場合を除き，公立小学校で英語活動が行われ始めたのは，総合的学習の時間で国際理解教育の一環として英会話の授業が考えられるとして手引書が出された2001年あたりからであろう。この手引書では小学校においては音声による英語活動が望ましいとされ，文字の扱いについては触れられていない（文部科学省，2001）。

この手引書は当時の小学校英語活動に大きな影響を与えていたと考えられる。その後，英語教育特区として小学校の英語教育に力を入れる市町村が生まれ，筆者のひとりもその一市で指導をしていたが，市独自のカリキュラムはこの手引書を参考にしていた。「小学校の英語活動では文字を扱わない」という意識は当時根強く，一日の行動を発表するためのワークシートで何曜日の行動かを示すために，児童が「Sunday」などと曜日だけを写し書いていたのを見た見学者から，「扱わないことになっている文字を書かせている」との指摘を受けたことが実際にあった。2008年に小学校学習指導要領が改訂され，５，６年生で必修となった「外国語活動」においても「読むこと及び書くことについては, 音声面を中心とした指導を補助する程度の扱いとするよう配慮」する必要があるとし，特に文字の持つ音に関しては，「発音と綴りとの関係については，中学校学習指導要領により中学校段階で扱うもの」と明記されている（文部科学省, 2008）。

その一方で，小学校における文字指導に関する研究は，上記のように文字指導は小学校英語教育の範疇ではないとされていた時代でも様々な形で行われてきており（例えば，荒川他，2000；伊東，2004；野呂，2004；大井・垣内，2004；北條・君，2010, 2011；大澤，2011；佐藤，2011；畑江，2012；北條・矢嶋・高橋；2012　など），文部科学省と同様，文字指導について否定的な意見もあるが，必要である，或いは小学生でも決して早すぎるわけではないと結論付けているものも多い。ただし，一言で「文字指導」といっても指導内容は様々だと田中・河合（2016）は述べている。この調査は中核教員研修において教員の「文字指導」に対する意識を調査したも

のだが，「文字指導」といってもアルファベットの読み方，つまり音声指導も含めた文字単体の指導から英単語などを書くことを想定している場合まであり，認識が統一していないと報告されている。その為，「英単語などを書くこと」を想定している教員は「小学生ではまだ早い」と考える傾向があったが，調査対象者92名のうち90%以上が文字指導は必要と考えており，具体的にはアルファベットの「名前読み」は３年生から，「音読み」は５年生からするのが望ましいと考える教員が多いという結果が出ている。

## ２．２　アナリティック・フォニックスとシンセティック・フォニックス

小学生などを対象とした児童英語教室では，以前より，英会話の力をつけるとともにフォニックス指導が行われてきた。フォニックスとは，もともと，英語母語話者が読み書き能力を身に付けるために綴りと発音の関係を学ばせる指導法のことであるが，英語を外国語として学ぶ（English as a foreign language：EFL）環境においても用いられている。その方法は主に２つあり，アナリティック・フォニックスとシンセティック・フォニックスである（表１）。アナリティック・フォニックスは学習者が音声で十分に語彙を持っていることが前提となっているのに対し，シンセティック・フォニックスでは単語を構成する音素とその代表的な１文字または２文字の綴りと対応させていき，無意味語も含め，音を足して読ませていくことが大きな違いである。このほか，日本で1980年代後半より取り入れられている松香フォニックスがある。ジングルと呼ばれるチャンツで一文字一音を導入するところから始まるが，その後，オンセット―ライム[2)]で体系的に学ぶことから，アナリティック・フォニックスとシンセティック・フォニックスの中間に位置すると考えられる。

表１　アナリティック・フォニックスとシンセティック・フォニックスの違い

| | アナリティック | シンセティック |
|---|---|---|
| 個々の音の重要性 | 初頭音（sunにおける/s/）を重視する。このルールは短い単語であれば効果的だが、長い単語に対しては問題があり、初期のリーディングの方略として推測が求められる | それぞれの場所にある各音素を大切にしている。例えば、sunにおいて、‘s’ も ‘u’ も ‘n’ も大切である。 |
| 位置 | 初頭音、オンセット―ライム、そしてワードファミリーが重視される | それぞれの位置にある音素を聞いて識別することが重視される。 |
| 音の学習の順序 | アルファベット順や、p/bから始める | 頻度順に音を学ぶ |
| アルファベットの役割 | アルファベットが中心。26の文字とそれらの音を個々に教える | 文字の名前は最初に教えず、42の音素とその音素がどのように文字であらわされるかを学ぶ |
| 各音の指導手順 | 決まっていない | 毎回決まった手順で学ぶ |
| その他 | | 多感覚<br>主にprecursiveの文字形を使用 |

（http://www.getreadingright.com.au/analytic-phonics-vs-synthetic-phonics/をもとに作成）

近年，シンセティック・フォニックスも児童英語教室を中心に広まりつつあり，教材が手に入りやすくなった。私立小学校のみならず，公立小学校でも取り入れている小学校が出始めている。本研究でもシンセティック・フォニックスを導入した小学校を研究対象校に，調査を行う。

## ３．研究

### ３．１　研究課題

本研究では，シンセティック・フォニックス指導を受けた小学校６年生の児童及び教員の意識及び，中学１年生になってからの知識の保持とフォニックス学習に対する意識を調査する。課題は以下のとおりである。

（１）授業はどのような形態で行われ，児童・指導者はそれぞれフォニックス学習・指導に対してどのように考えているか。

（２）６年生でフォニックス学習を経験した中学１年生はどの程度学習で得た知識を保持しているか。

（３）前述の中学１年生の，フォニックス学習に対する意識はどうか。

### ３．２　研究方法

首都圏郊外のA市にあるB小学校の６年生児童に対し，シンセティック・フォニックスの手法を用いて，2017年５月から2018年３月にかけて毎回45分授業のうちの15分を使って，文字の音読み指導を行い，児童118名の「文字の音を学ぶこと」に対する意識を４件法と自由記述で調査した。質問項目は以下のとおりである。

１．文字の＜音＞を学ぶことは楽しいか
２．文字が読めるようになってきたと思うか
３．文字の＜音＞を学ぶことは役に立つと思うか
４．文字の＜音＞をもっと学びたいか
５．その他思うこと（自由記述）

また，指導者には児童の様子や指導法に対する意識について，５，６年生の学級担任（HRT）５名には選択式と自由記述で，外国人指導助手（ALT）２名には自由記述の質問紙調査を行った。以下がその質問項目である。

●HRTに対する質問

１．このフォニックスの指導について，よいと感じる面はどのようなところか。
２．このフォニックスを用いて指導してきて，児童の変容が見られるとしたらどのようなところか。
３．全体的に見て，小学校の外国語教育の中で，フォニックス指導することは有効だと思うか。

４．このフォニックスを用いて担任がひとりで指導する場合，不安なことはあるか。

●ALTに対する質問

１．How did you get to know how to teach synthetic phonics? How long have you taught phonics? （どのようにシンセティック・フォニックスの指導方法を知ったか。フォニックスを教えて何年になるか）

２．What do you think about teaching synthetic phonics to children at elementary school? (as a native speaker of English or as a person who learned English as a second language) （ネイティブスピーカーとして，あるいは第二言語として英語を学んだものとして，小学校で子どもにシンセティック・フォニックスを指導することについてどのように考えるか）

３．Are/Were there any difficulties when you teach/taught synthetic phonics to elementary school students? What are the problems, if any, when teaching phonics at elementary school? （小学生にシンセティック・フォニックスを指導するとき，困難なことはあるか。あるとしたら，どういう問題があるのか）

４．How do you perceive children's attitudes toward phonics learning? （子供たちのフォニックス学習に対する態度についてどのように思うか）

B小学校の児童は他の小学校と合流することなく，C中学校に進学する。上記の指導を2017年度に受けた６年生が中学１年生になった2018年６月に，５つの３文字語について，保持の程度を書き取りテストで調査するとともに，再度，フォニックス学習に関連して以下の内容の質問紙調査を行った。

１．フォニックスの活動のどこが好きか。
２．小学校の時を思い出して，フォニックスの勉強は難しかったか。
３．英語の発音は難しいか。
４．小学校や中学校でのフォニックスの勉強は中学での英語の勉強に役に立っていると思うか。
５．小学校の英語の時間にもっとやっておけばよかったと思うことは何か。

A市の2017年度の外国語活動の実施状況は以下のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| １～２年生 | 年間 | ３コマ程度 |
| ３～４年生 | 年間 | 10コマ程度 |
| ５～６年生 | 年間 | 35コマ |

指導形態は，担任とJTEとのティームティーチング（TT）で，ALTが加わることもある。教材はJolly Learning社の『Phonics Big book』と文字を手書きするための４線ワークシートを使用

した。Jolly Learning社の教材は絵本になっており，１つの音に対して一枚の絵とそれに付随するお話，そしてアクションがついている。指導順序が決まっており，どの音を学習するときにも以下のような順で指導することが求められる。

①音の復習
②お話
③アクション
④文字指導（文字の書き方）
⑤音の聞き取り
⑥ブレンディング（音を繋ぐ）
⑦ディクテーション（音のかたまりを一音ずつにわけて書く）（ジョリーラーニング社, 2017）

### ３．３　結果と考察

#### ３．３．１　児童の意識

６年生のフォニックス学習に関する意識を調査した結果は以下のとおりである（N=118）。「文字の＜音＞を学ぶことは楽しいか」については96％の児童が「とても楽しい」「楽しい」と回答した（図１）。「文字が読めるようになってきたと思うか」という質問に対しても「とてもそう思う」「そう思う」と回答した児童が90％近くにのぼった（図２）。「文字の＜音＞を学ぶことは役に立つか」については１名を除いて「とても役に立つ」あるいは「役に立つ」と回答し（図３），役立ち感が高いことがわかる。それに呼応するように，「もっと学びたいか」という質問に対しても２名が「あまり学びたくない」１名が「学びたくない」と回答している（図４）が大多数が学ぶことに対する意欲も持っていることがわかる。自由記述欄では「発音（の練習）が楽しかった」という記述がみられ，「音と綴り」を学んでいるというよりは「発音の練習」だと児童がとらえていた可能性がある。実際，フォニックス指導の中心にあるJTEに確認したところ，中学生になった際に「フォニックスというのは音と綴りの関係を学ぶもの」であると伝えているが，小学校段階ではこの活動を「フォニックス」と呼んでいるだけで，明示的に音と綴りを学んでいるという言い方はしていないとのことであった。しかし，「楽しい」部分が「発音の練習」であったとしても「読めるようになってきている」と感じている児童の割合を考慮すると，その活動が「文字を読む」につながり，「役に立っている」と肯定的にとらえられていることは「音と綴りの関係」に気付き始めている証拠と言えるだろう。

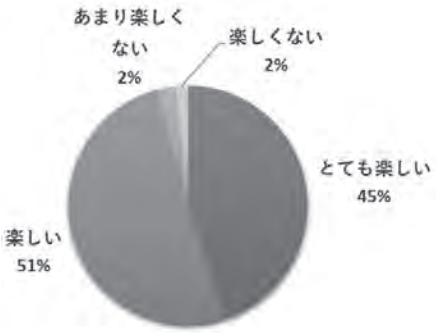


図１　文字の「音」を学ぶことの楽しさ

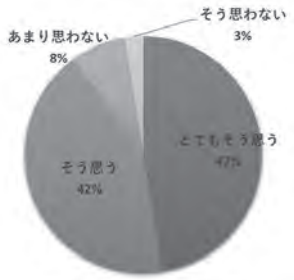


図２　文字を読めるようになってきた

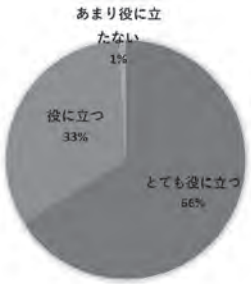


図３　文字の「音」を学ぶことの役立ち感

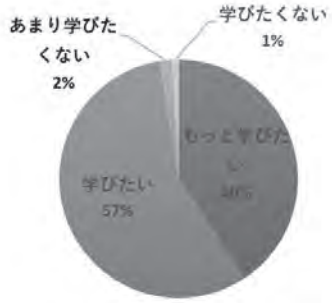


図４　文字の「音」を学ぶ意欲

### ３．３．２　教員の意識

３．２で指導の流れを示したが，各指導者の役割を示したものが表２である。

表２　各指導者の役割

| | HRT（小学校担任） | JTE（中学校英語科教員） | ALT（外国人講師） |
|---|---|---|---|
| ①音の復習 | | 既習文字と音の復習 | |
| ②お話 | 絵本を読む<br>異文化理解教育 | | 絵本を見せながら、子どもたちに絵のことについてインタラクションをとる |
| ③アクション<br>④文字の書き方 | 児童とともにアクションと発音をする<br>机間指導・指名 | 新出文字のアクション・音・書き方 | 新出単語の発音 |
| ⑤音の聞き取り | 机間指導 | | 単語に含まれる音を探す（音素認識）ための出題 |
| ⑥ブレンディング | | Blending（音の足し算→読み）の指導 | |
| ⑦ディクテーション | | Segmentation（単語を聞いて、音を分け、文字に置き換える）の指導。その後、正解と意味の確認 | Segmentationをさせる際に、単語を読む |

JTEは，学習指導要領に「音と綴りの関係は中学校で指導すること」であると書かれていることは知っているが，中学校での英語指導の現状を踏まえ，「多様な子どもがいるなかで，小学校からじっくり取り組むことで負担が少ない」と考えており，実際，「（児童は６年生を修了するまでに）小文字がしっかり書けるようになった」と感じていた。次に，ALTの意識である。2017年度のALT（F先生）と2018年度のALT（G先生）に質問紙で調査した。２名とも指導経験は２年である。F先生は，「自分自身が幼稚園のころよりシンセティック・フォニックスを学んでおり，小学校でも続けて学んだことが本当に助けになった」と感じている。指導法については，自分の幼稚園時代に使われていたカリキュラムからテクニックを知り，また，フォニックス指導法のセミナーにもいくつか参加したとのことであった。児童がフォニックスを学ぶことに関して「とても助けになると思う。というのは英語を学ぶ中でライティングとリーディングを伸ばすからだ。他の国々の中には優先順位が最も低いものと位置付けられているようだが，私にとっては英語だけでなく，他の言語を学ぶ上での基礎基本である。」と回答した。また，児童のフォニックス学習の際の態度に関しては「時間が足りない」ことや「児童のなかには参加や関心が足りない者がいる」ということに困難を感じつつも，「今の学校では，フォニックス指導としてジョリーフォニックスのプログラムがある。全員ではないが、ほとんどの児童がフォニックスを学び，それを用いて遊ぶ方法に関して楽しんでいる。もちろん，それを即座に全部覚えるわけではないが，授業に取り入れることで，たとえ短時間であっても多くの児童の成長が見られる。」と述べた。一方，フィリピン出身のG先生は，大学でシンセティック・フォニックスの指導法を学んでおり，フィリピンで1年，日本で１年の指導経験があった。フォニックスは「子供にとって文字や単語を学ぶよい方法」で，「文字や単語を言ったり読んだりする助けにもなる」と考えていた。指導していて困ったことはないと言い，「児童にとって楽しく，そしてインタラクティブにすること」によって子供の肯定的学習態度を引き出すと述べた。

最後に，HRTの意識についてである。「シンセティック・フォニックスの指導についてよいと思う点」と「児童の変容」について、それぞれ選択式と自由記述で回答を得た。指導に関しては５名の担任すべてがよいと考えているのが「ジェスチャー[3)] があること」であった（表３）。そして，全員がフォニックス学習に対して有用感を持っていた。実際，A先生からは「休み時間によくジェスチャーをやっている」，表４の項目にはチェックがなかったB先生からも「ジェスチャーを通して言葉を楽しんで理解しようとしている。授業中に自然にジェスチャーが出る。」との回答が自由記述欄で得られた。一方，現在はティームティーチングで指導をしているが，一人で授業実践をするとなると５人中４人が不安を感じていることがわかった。４人ともが挙げたのが発音に対する不安である。また，A先生は「ひとりでするなら評価はどうするのか」「ひとりで授業をスムーズに流せるのか」ということも不安として挙げている。

表３　指導に関してよいと思う点

| | A | B | C | D | E |
|---|---|---|---|---|---|
| ストーリーがある | | ✓ | | | |
| 頻度順に文字が提示される | ✓ | | | ✓ | |
| ジェスチャーがある | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |
| 指導手順が決まっている | ✓ | | | ✓ | |
| 有用である | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ | ✓ |

表４　児童の変容

| | A | B | C | D | E |
|---|---|---|---|---|---|
| 英語の音に興味関心を持つようになった | ✓ | | ✓ | ✓ | ✓ |
| アルファベットで書かれているものを読もうとしている様子が見られた | ✓ | | | ✓ | ✓ |
| 外国語活動の授業以外でも，ジェスチャーをしながら発音している児童がいる | ✓ | | | | |
| 英語学習に積極的になった | ✓ | | ✓ | | |

この質問紙調査以外に，D先生には直接話を聞くことができた。D先生は，「６年生は『書きたい、でも難しそう』と思っているが，楽しくできることから，（この方法は）やりやすい」と感じており，「負担にならず，『難しくていやだ』という子がいなくなった」と述べた。また，「書ける・できるという気持ちが自信につながっている」し，「リスニングが聞き取れるようになっているようだ」という見取りをしている。さらに，指導するという側面からは「教え方がパターン化されているのがよい」と肯定的にとらえているが，中学教員（JTE）がサポートしてくださっているのでやれている。」と感じていた。

以上のように，シンセティック・フォニックスの導入を決めたJTEのみならず，担任もALTも肯定的にとらえているほか，担任は実際に児童の肯定的な変容も感じており，フォニックス指導がうまく行っているように思われる。

### ３．３．４　中学１年生に対する調査

2018年６月に中学１年生（N=116）を対象に，音を文字にするテストを行った。単語は，中学１年生のこの時点で教科書にて学習していない語で，すべて違う文字で構成されるようにした。提示の方法は以下のとおりである。ジェスチャーと音と文字の組み合わせで学習をしてきたことからジェスチャー付きで一音ずつを１問，ジェスチャーなしだが一音ずつ聞いて綴れるかを見るための問題を１問，残りの３問は複数の音からなる単語を聞いての書き取りを行った。特に，JTEが発音するため，日本人が正確に発音するのが困難な“u”の音[ʌ]を持つ単語をジェスチャー付きにした。テストの結果を表５に示す。

①bus　　“b” “u” “s” と一音ずつ分けて，ジェスチャー付きで発音。
②pit　　“p” “i” “t” と一音ずつ分けて発音。ジェスチャーはなし。
③den　　“den”と単語をそのまま発音。
④jam　　“jam”と単語をそのまま発音。
⑤log　　“log”と単語をそのまま発音。

表５　正答数と正答率（N=116）

| | bus | pit | den | jam | log |
|---|---|---|---|---|---|
| 正答人数 | 82 | 101 | 73 | 85 | 61 |
| 正答率 | 70.7% | 87.1% | 62.9% | 73.3% | 52.6% |

誤答についてであるが，“bus”については116名中17名が“bas”と綴った。この項目はジェスチャーをつけているので，“u”のジェスチャーと文字が結びついていない，或いは忘れてしまった児童がいることを示している。さらに，ジェスチャーよりも「音」を重視し，ローマ字の「あ」に対応する“a”を選んだ可能性も考えられる。“pit”に関しては，“put”や“pet”と書かれているものがあったが，５つの中で最も正答率が高いことの一因は，一音ずつ発音されていることに加えて，この３つの文字がシンセティックフォニックスの非常に早い時期に導入される，頻度の高い文字と音であることと関係があるかもしれない。３つ目の“den”については10人が“ben”と綴っており，“b“と“d”の区別がついていない生徒が約10％いた。“jam”については“jem”や“jum”のような誤答例が見られた。最も正答率の低い“log”については，日本語に置き換えると区別ができない“r”を用いて“rog” と綴った生徒が13人いた。“o”であるべきところを“oo”と綴っている生徒も14名いたが，これは[ɔ]と発音する際の長さからローマ字の知識を使い，“o”だけでは短いので２つを重ねた可能性が推測される。このように，ローマ字の知識が正しく綴ることの障害になっている可能性も否めないが，一方で，音を聞くだけで綴るために，複数の音からなる塊を一音ずつに分ける（セグメンテーション）力が求められた③～⑤については，「ローマ字は日本語の音をアルファベット文字に当てはめたものであるため，英語の文字学習を開始した際に日本語の音韻が転移してしまう」（山本・池本, 2017）といった英語文字学習におけるローマ字の弊害の一つである，最後に母音字をつけてしまうような回答は全回答のなかで３つだけであったことは注目に値する（jamu, zyamu, looku）。このことについて，JTEは「以前の生徒と比べて，より英語らしい発音で『やりとり』『発表』ができている。」と述べており，フォニックス指導は発音のための指導法ではないが，語尾に母音をつけない「英語らしい発音」が副産物と言えるかもしれない。

テストをした時間とは別に，選択肢を与える形式と自由記述を組み合わせ，同じ生徒たちへの意識調査も実施した（資料１参照）。フォニックスの活動のどこが好きであったかについて複数

回答可で尋ねた結果は表６のとおりである。自由記述欄には下記の選択肢の他，「英語を理解できるところ」「音が覚えられるところ」「発音がわかりやすい」「ジェスチャーが絵や話などに合っている」「面白い」との記述があった一方，「あまり好きではない」「好きではない」と記述して，好きなところについて選択をしなかった生徒が２名いた。

表６　６年生の時に行ったフォニックス学習のどこが好きだったか（N=118）

| | | |
|---|---|---|
| 絵本にお話がついているところ | 62 | 51.2% |
| ジェスチャーがついているところ | 55 | 45.5% |
| 文字とジェスチャーと音がセットになっているところ | 67 | 55.4% |

*複数回答あり，無回答含む

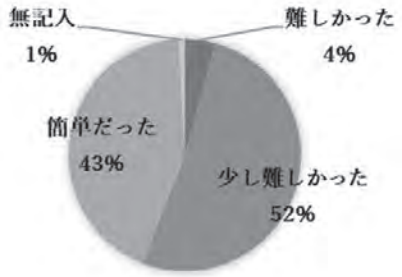


図５　フォニックス学習を振り返っての意識

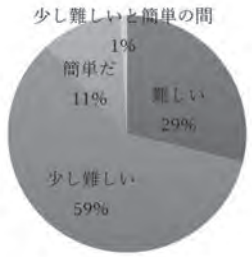


図６　英語の発音に対する意識

小学校時代のフォニックス学習については，「難しかった」と答えた生徒が5名（４％，小数第１位を四捨五入。以下同様），「少し難しかった」が61名（52％）で，「簡単だった」と答えた生徒は51名（43％）であった（図５）。また，手島（2011）が「正しい発音を身に着けると，単語の綴りが容易に覚えられる」と言うように，音と綴りの関係は正しい発音ができてこそ有効であるため，英語の発音が難しいかについても尋ねたところ，「難しい」が34名（29%），「少し難しい」が70名（59%），「少し難しい」と「簡単」の間に丸を付けた者が１名，そして「簡単だ」と回答した生徒は13名（11%）であった（図６）。

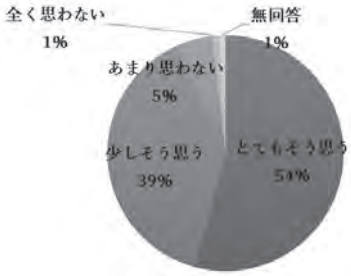


図７　フォニックスが中学での勉強に役に立っているか

次に，「フォニックスの勉強は中学での英語の勉強に役に立っていると思うか」という問いに対しては「とてもそう思う」が64人（54%），「そう思う」が46人（39%），「あまり思わない」が６人（５%），「全く思わない」が１名（１%）であった（無回答１名）（図７）。最後に，「小学校の英語の時間にもっとやっておけばよかったと思うこと」に関する回答は表７のとおりである。

表７　小学校の英語の時間にもっとやっておけばよかったと思うこと（N=118）

| | | |
|---|---|---|
| 英語で話すこと | 60 | 51% |
| 英語で聞いて理解すること | 64 | 54% |
| 英語の文を読むこと | 56 | 47% |
| 英語で書くこと | 74 | 63% |

*複数回答あり，無回答含む

「書くこと」を選んだ生徒が一番多かったことから，中学の学習で「書くこと」に苦労していることが推測される。また，自由記述にも「フォニックスを覚えておくこと」（２名）「ジェスチャーを積極的にやること」「単語を書ける」「文などで書く」のように「書くこと」に関わることが記述されていたほか，「動詞・形容詞」「一般動詞やbe動詞を覚えたりなど」「動詞・名詞を知っていたほうがよかった」「単語を覚えておくこと」「英検をやること」が挙げられた。綴りのテストとは別の機会にこの質問紙調査を実施したものの，６年生で行った文字指導の復習であるテストをしたことによって「単語を書けること」や単語を書くために「フォニックスが役に立つのではないか」と再認識した可能性が考えられる。また，後半に挙げた項目に関しては，小学校では文法の明示的指導はしないが，中学の英語学習において文法や文法用語を学ぶため，品詞ごとの知識の必要感を感じていることや，中間・期末テストのはざまで英検の実施時期に近かったことから試験を意識したのではないかと推測される。

### ３．３．５　まとめ

単語レベルで発音した３単語について注目すると，中学校の教科書に出てこない単語でも50～70%の生徒が，複数の音からなる単語を音に分け，文字と結びつけて書くことができるということが示された。また，フォニックス指導をすることによって，ローマ字の弊害の一つと言われる「母音字で終わるような綴り」はほぼ見られなかったことが効果の一つと考えられる一方で，綴りがわからないときにはローマ字の知識に頼ったと推測されるような誤り，すなわち，日本語の「ア」に近いbusの“u”のところを“a”と綴ったり，logの“l”を“r”にしたりといった誤りが見られたことから，正しく綴るためには，英語特有の音について正しい発音と音の識別の強化が必要であることが示唆される。文字が示す音の読み方指導について，教員はもとより，おおむね児童・生徒も肯定的にとらえており，有用感を持っていることが示された。

## ４．結論

2020年の新しい『小学校学習指導要領』の下で行われる５，６年生に向けての「外国語科」では，今までの音声中心の指導から「読むこと」「書くこと」が導入される。ここでは「音と綴りの関係」までは求められないが，音素認識につながるaは[ei]と言う名前の他に[ae]という音を持っていることまで指導することになっているが，それをどのように指導していくのか，また今後どのような展開が待っているのかについてははっきりした展望が見えない。そこで,本論文では先行的にシンセティック・フォニックスという方法で文字の持つ音について学ぶ現場の児童と指導者の意識，さらにはこの児童たちが中学１年生になってからの綴りテストと意識調査を通して，その実態と効果について検討した。

児童はおおむね，お話があり，ジェスチャーのついた学習方法を楽しんでおり，中学生になってからもその学習に対して有用感を感じている者が多かった。担任は児童の肯定的な変容を感じており，フォニックスに対して有用感を持っていた。ALTも自身の経験と指導を通した手ごたえから，フォニックスは英語学習に有用だと考えている。この結果から，フォニックスは児童・生徒にとって楽しみながら綴りの学習をすることができる指導法だと示唆される。しかし，フォニックスと一言で言っても指導法は１種類ではなく，今回の研究対象校のように絵本やジェスチャーを使う指導法ではない場合，子供たちが果たして楽しく学べるのかはさらなる研究が必要である。

今後，小学校は英語専科が入る可能性もあり，指導助手を増やすことも考えられているようであるが，すべての学校でそのような態勢が整うまでには時間がかかると考えられる。本研究を実施した小学校では，担任・中学教員・ALTの３人それぞれに特長を持つ指導者が関わるという恵まれた環境にあった。この研究対象校では，前年度はJTEが行っていた指導部分を2018年度に入り徐々に担任に移しつつある。担任が一人でする場合の不安は「発音」に関することであり，「綴りと音」を結びつけるには正確に「音」を出す必要があるため，この部分は可能であればALT或いはJTEが補助するのが望ましいと考えられる。一方，児童が楽しみながら学習を進めるためには児童の実態をよく知っている担任こそが，児童の実態に合う話題を足したりしてインタラクションを増やすことができるだろう。どの方法を取るにせよ，指導をするためには教材が必要である。本研究では，シンセティック・フォニックスの指導のための教材をJTEが自費で用意していた。同様のことをどの学校でもするにはそれなりの予算が必要である。

本調査のJTE（中学校英語科教員）は中学校でもっと時間をかければ負担が軽くなるであろうことはわかっていてもカリキュラム上なかなか時間を割くことができない文字学習を，小学校で丁寧に指導することができ，特に小文字を書けるようになったことで学習への負担が減っているようだと感じている。また，小中連携の観点から，中学校教員が小学校での実践を知っていることで誤りの分析がしやすくなり，中学校での指導に生かせると考えられる。丁寧な指導が求めら

れる文字指導については特に，このようなティームティーチングの体制で指導するのがよいと考えられる。

**謝辞**

本研究に際し，インタビュー・質問紙調査にご協力くださったB小学校の担任及びALTの先生方に感謝申し上げます。

**注**

1）新しい学習指導要領では，従来の「４技能」から「５領域」（「話す」が「話す（やりとり）」「話す（発表）」に分割）でそれぞれ指導内容が示されている。

2）語頭の子音（オンセット）と，あとに続く母音＋子音の連鎖（ライム）の組み合わせのこと。例えば，dogの場合，dがオンセットでogがライムである。

3）ジョリーフォニックス社では「アクション」と呼んでいる。

**引用・参考文献**

伊東弥香.（2004）.「日本における公立小学校からの一貫性英語教育の意義と目的：第二言語習得と保持・喪失の視点から」『日本児童英語教育学会研究紀要』第23号, 31-46.

大井恭子・垣内信子.（2004）.「これからの小学校英語の方向性に関する一考察―ある国立大学付属小学校のケーススタディから―」『千葉大学教育学部研究紀要』第52巻, 209-223.

大澤美穂子.（2011）.「小学校の外国語活動における文字指導の必要性」『英語教育』60（7），63-65.

佐藤佳子.（2011）.「小学校外国語活動における音声と文字指導の導入について」『日本女子大学紀要文学部紀要』60, 132-123.

JASTEC関東甲信越支部調査研究第二次プロジェクト・チーム.（2000）.「子どもの言語習得と文字―日本の子どもの英語学習における文字の役割について〈基礎研究編〉」『日本児童英語教育学会研究紀要』第19号，35-47.

ジョリーラーニング社.（2017）.『はじめてのジョリーフォニックス』東京：東京書籍

田中真紀子・河合裕美.（2016）.「文字指導に対する小学校教員の意識―千葉県中学教員研修後のアンケート結果から―」『JES Journal』Vol. 16，163-178.

手島　良.（2011）.「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について―発音指導の現状と課題―」『音声研究』第15巻第１号, 31-43.

野呂忠司.（2004）.「小学校の「英語活動」における文字指導の意義と必要性―小学校と中学校における文字指導の連携をめざして―」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第７号，151-157.

畑江美佳.（2012）.「外国語活動における文字導入の適期と方法に関する研究－小・中接続カリキュラムを視野に入れて－」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』第３号, 13-22.

北條礼子・君佳子.（2010).「文字指導を中心とした小学校英語活動の試み」『教育実践研究』第20集, 19-26.

北條礼子・君佳子.（2011).「小学校英語活動における文字指導の試み」『教育実践研究』第21集, 1-8.

北條礼子・矢嶋隆之・高橋沙矢香.（2012).「小学校外国語活動における文字指導導入の試み」『教育実践研究』第22集, 11-20.

文部科学省.（2001).『小学校英語活動実践の手引き』東京：開隆堂出版

文部科学省.（2008).『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東京：東洋館出版社

文部科学省.（2017).『小学校学習指導要領解説　外国語科編』

山本玲子・池本淳子.（2017).「英語学習につながるヘボン式ローマ字学習のための 教材開発」『JES Journal』Vol. 17, 38-53.

**（おさだえり　國學院大學人間開発学部初等教育学科准教授）**

**（あかいせいこ　鶴ヶ島市立西中学校教諭）**

**資料１**

１．フォニックスの活動のどこが好きですか。

（　　）絵本にお話がついているところ。

（　　）ジェスチャーがついているところ。

（　　）文字とジェスチャーと音がセットになっているところ。

そのほか（　　）

２．小学校の時を思い出して、フォニックスの勉強はむずかしかったですか。

（　　）むずかしかった

（　　）少しむずかしかった

（　　）かんたんだった

３．英語の発音はむずかしいですか。

（　　）むずかしい

（　　）少しむずかしい

（　　）かんたんだ

４．小学校や中学校でのフォニックスの勉強は中学での英語の勉強に役に立っていると思いますか。

（　　）とてもそう思う

（　　）少しそう思う

（　　）あまり思わない

（　　）まったく思わない

５．小学校の英語の時間に、もっとやっておけばよかったと思うことは何ですか。

（　　）英語で話すこと

（　　）英語で聞いて理解すること

（　　）英語の文を読むこと

（　　）英語で書くこと

そのほか　（　　）

ありがとうございました。